最後に，敢えて要望を述べるとすれば，理論上哲学上の偏りの補完が必要であるように思われた。本書は全編を通して配置されたコラムにおいて，現代地理学の精華たる理論の形成に影響を与えた人物を紹介するが，その撰は果たして教科書たるに相応しいものであったか，一抹の疑念が残る。例えば，コラムには地理学理論に関する重要人物としてアントニオ・グラムシ（p.103）やミシェル・フーコー（p.155）の名が挙がるが，これらの人選が「地理学的思考」を初学者に涵養せんとする本書の目的と合致するであろうか。現代地理学への影響のみを鑑みても，少なくともカントやフンボルト，英語圏に限ってもデーヴィスやサウアーを措いてまで書き残すべき人物とは考えられない。より広い関心の下，地理学に関する理論家を紹介するならば，本書は一層普遍的な「地理学的思考」の教科書となったであろうと惜しまれるのである。

されどこれは所謂白璧の微瑕に過ぎない。本書は地理学が，そしてあらゆる学術が理論無しにはあり得ぬことを率直に伝え，地理学的思考は地理学的理論によってのみ為し得ることを知らしめる真の意味での教科書である。かつ，掴み難い現代地理学思想の現況の真摯な案内であることにも変わりはない。多くの初学者に，常に初学者たらんとする好学の士に，必読の教科書として本書を強く推薦したい。

（益田理広）

平岡昭利監修・須山　聡・宮内久光・助重雄久編著：『離島研究VI』海青社，2018年10月刊，208p.，3,700円（税別）

島をフィールドとした研究をまとめた『離島研究』は，最初に刊行された2003年以降，数年に1冊のペースで継続的に出版されてきた。本シリーズの編者として長らくシリーズを牽引した平岡昭利氏が『離島研究III』等の業績で本学会の学会賞（2010年度）を受賞していることもあり，本シリーズについてよくご存じの方も多いと思われるが，今回『離島研究VI』が刊行されたので，その内容を簡単に紹介したい。

シリーズ6作目となる本書は，長らく編者を務めた平岡昭利が監修となり，須山聡・宮内久光・助重雄久が編著者となる布陣変更が行われたが，その構成に大きな変更はない。離島をフィールドとする12の論文が3部にまとめられている。その構成は以下の通りである（カッコ内は著者名）。

Ⅰ　島のかたち
　1章　「究極の過疎」無人島の発生－過疎化言説に翻弄された島じま－（須山　聡）
　2章　沖縄県宮古島・狩俣集落の空間的構造とその変化－地形的条件および土地所有との関わりにも注目して－（山元貴継）
　3章　離島の暮らしの持続性と食料供給－山口県周防大島を例とした検討－（荒木一視）
Ⅱ　島のなりわい
　4章　愛媛県日振島における水産業と生活形態（淡野寧彦）
　5章　東京都利島における高齢者のツバキ実生産とその意義（植村円香）
　6章　沖縄県離島におけるコンビニエンスストアの立地展開とチェーン間競合（宮内久光）
　7章　長崎県小値賀島における観光まちづくりの展開（中條曉仁）
　8章　沖縄県宮古諸島における観光振興とその「反作用」（助重雄久）
Ⅲ　島のくらし
　9章　東京都三宅島神着における初午祭の継承に関する文化地理学的研究（筒井　裕）
　10章　鹿児島県奄美大島におけるIターン者の

選別・受入を通じた集落の維持－瀬戸内町嘉鉄にみる「限界集落論」の反証－（髙橋昂輝）

11章　鹿児島県奄美大島のカトリックと地域社会－そのめまぐるしい相互関係の変化－（麻生　将）

12章　鹿児島県奄美大島におけるハブへの人びとの対応－撲滅と棲み分けに着目して－（橋本　操）

本書の概要をごく簡単に紹介すると，第I部「島のかたち」は，無人島の発生（1章），地形的条件も考慮した空間構造の検討（2章），生活に不可欠な食料供給からみた離島（3章）からなり，離島に共通する一般的な特徴を考察する。続く第II部「島のなりわい」では離島における経済活動が取り上げられる。水産業（4章）および農業（5章）という第一次産業のみでなく，コンビニエンスストアの進出（6章）および観光業（7章, 8章）が取り上げられ，離島の経済活動の多様化の一端が示される。さらに第III部「島のくらし」は，島の伝統的な祭礼の維持（9章），移住者の流入による集落維持（10章），キリスト教の流入に伴う地域の対応（11章），人的被害をもたらすこともあるハブと人々の生活（12章）が論じられる。

このように，多様な視点から分析された12の論考について詳細に述べることは評者の力及ばぬところである。ここでは，一読して感じたことを述べてみたい。

本書の大きな特徴の一つが，行政や島外からの一面的な視点では見えてこない離島の実情を活写している点であろう。例えば，人口減少が無人島化に直結するのではなく，効率化を求める行政側の働きかけが無人島化をもたらした（1章）。また，地域活性化策として期待される観光振興は住民を取り込んだ主体的な活動ができればポジティブな効果をもたらする場合（7章）もあるが，一方で，島外の資本や労働力に依存した急速な観光化は島民の生活や産業に悪影響を及ぼしている（8章）。さらに，ハブを駆除するためのマングース導入は失敗した一方で，島に暮らす人々はハブと棲み分けしつつ商品・資源として利用する方法を選択している（12章）。地理学の詳細なフィールドワークに裏付けられた論考は，大きな説得力を持って，島の人々の生活や暮らしに密着した施策や取り組みの重要性を示している。

また，本書で『離島研究』も6冊を数えるが，単に離島に関する研究事例が増えただけでなく，分析の視点等が深まっていることも重要であろう。例えば，評者が関心を持つ人口移動に関してみると，『離島研究』シリーズ（特にIV，V）では離島へのUターン，Iターン，先住者と移住者の混住化など様々な視点からの研究が蓄積されてきた。本書（10章）でも奄美大島へのIターンが検討され，移住者の島内での居住経歴や住宅取得過程などが詳細に検討されている。その結果，島外からの単純なIターンではなく，島内他地域での居住を経験した後に島内の社会的ネットワークを経由して現住地に住宅を取得し移動する「L字状」の移動パターンの存在を明らかにしている。このような過程を経ることで，住民と移住者のマッチングが行われている。その結果，移住者は集落の行事に積極的に参加するなど社会的ネットワークへの参画が実現し，コミュニティの維持という面でも寄与している。このような，居住経歴や住宅取得過程の詳細な分析は大都市圏ではほぼ不可能であり，島という限定された空間と，濃密なコミュニケーションを有する小規模な集落だからこそ可能となったものであろう。それによって，受け入れ地域の住民による選別という新たな知見をもたらしている。

評者の力不足から言及できなかった章が多数あ

るが，本書は，緻密なフィールドワークに基づく地理学研究の面白さや，島という限定された空間だからこそ可能となる詳細な分析とそこから得られる新たな知見がある。どの章を読んでも様々な発見が詰まっている良書である。改めて，一読をお勧めしたい。

さて『離島研究』シリーズの読者の中には，自らも島に足を運んでみたい（できれば自分の専門を生かした調査もしてみたい）と考える人も多いだろう。また『離島研究』所収の詳細な論考を読む際に，その島の位置や形状，歴史的背景や人口，主要な産業などの全体像を把握したいという場合もあるだろう。そのような場合に有益な情報を提供してくれるのが，平岡・須山・宮内編の『図説日本の島 －76の魅力ある島々の営み－』である。本書は朝倉書店から出版されている図説シリーズの一書で，本書は，いわば日本の島のカタログ的な書籍である。一つの島が2ページまたは4ページにコンパクトにまとめられ，島の全域を納めた地形図と豊富な写真，島の特徴を簡潔にまとめた文章で島の概要を知ることができる。本書を眺めながら，どこへ行こうか，どんなところか，と考えているだけで，日常の雑務を忘れて旅行気分に浸ることもできる。島に興味を持つすべての人にお勧めの一冊である。

文　献

平岡昭利・須山　聡・宮内久光編（2018）：『図説日本の島 －76の魅力ある島々の営み－』朝倉書店，2018年10月刊，192p.

（平井　誠）

山下清海：『世界のチャイナタウンの形成と変容ーフィールドワークから華人社会を探究する』明石書店，2019年2月刊，328p.，4,600円（税別）.

華人に関する研究において，チャイナタウンは重要な研究対象であり研究も少なくないが，多くの研究は一定の国または地域に限られている。このような状況に対して，グローバルな視点からチャイナタウンを比較して類型化するのが本書の狙いである。筆者が知る限り，時間軸から言っても空間軸から見ても，本書の著者である山下清海氏ほど世界のチャイナタウンを長く広く研究する研究者は他にいない。本書は，著者が40年あまりかけて世界各地のチャイナタウンを研究してきた集大成と言える。

本書は序論，ケーススタディ，結論の3部から構成されている。

第1部の「序論」で研究の視点と方法を定めたうえで，第2部のケーススタディでは米国，フランス，ブラジル，インド，モーリシャス，マレーシア，ラオス，韓国，日本のチャイナタウンを対象として，世界に広く分布する事例を詳細に考察する。第3部で時間軸とチャイナタウンの特徴という枠組みで世界に広がる個別事例の特性と規則を探り，本書の研究価値を高めている。

まず，第1部では，チャイナタウン研究において，著者は「地理学的視点」の見方と世界各地の「華人社会の地域特色」を重視する重要性を強調する。「地理学的視点」とは，著者曰く，華人社会研究に対する地理学的特色をアピールすることは，地理学の社会的地位の向上にとっても必要不可欠である。そこで，社会現象や社会問題を研究対象とする社会学と区別して地理学的な研究アプローチは，チャイナタウンの立地・形成・構造・景観などについて総合的に考察する。加えて，世界各地における華人社会の地域的特色とその背景